

高校生の対人恐怖心性が インターネット依存傾向に与える影響とその性差

Effects of Anthropobic Tendency on Internet Addiction and its Gender Differences
among High School Students

稲垣 俊介^{*,**} 和田 裕一^{**} 堀田 龍也^{**}

Shunsuke Inagaki^{*,**} Yuichi Wada^{**} Tatsuya Horita^{**}

東京都立江北高等学校* 東北大学大学院情報科学研究科**

Tokyo Metropolitan Kohoku High School *

Graduate School of Information Sciences, Tohoku University **

<あらまし> 高校生の対人恐怖心性がインターネット依存傾向に与える影響とその性差を検討した。本研究では、対人恐怖心性尺度(堀井・小川 1996)の得点を説明変数、インターネット依存傾向測定尺度(鶴田ほか 2014)の得点を目的変数として、重回帰分析を行った。その結果、対人恐怖心性とインターネット依存傾向に関連があることが見出された。また、インターネットの長時間利用に関して、男子は「自分を統制できない」、女子は「自分や他人が気になる」がそれぞれ要因となって「長時間利用」を引き起こしていることを示し、その性差について考察をした。

<キーワード> 高校生 情報モラル教育 対人恐怖心性 インターネット依存 性差

1. 問題の所在と目的

高校生が携行可能なインターネット(以下、ネット)端末であるスマートフォン(以下、スマホ)を片時も手放せなくなり、日常生活や社会生活に悪影響が及ぶ、いわゆるインターネット依存(以下、ネット依存)を問題視する指摘がある。内閣府(2018)によると、スマホでネットを1日に4時間以上利用する高校生は23.6%であり、小・中・高等学校と学校種が上がるにつれて利用時間が長くなる。また、高校生のネットの利用内容は「コミュニケーション(89.8%)」が最も多い。高校生はいつでもネットを介して他者とコミュニケーションがとれる状況にある者が多く、ひとりで過ごすことが少ないと推測できる。また、ひとりで過ごすことで「孤独・不安」を感じる者もあり、対人恐怖心性が高いほど、その「孤独・不安」の感情が高くなるとされる(海野・三浦 2010)。よって、対人恐怖心性が高い高校生は、ひとりで過ごすことを避けるために、スマホが手放せなくなり、ネット依存へと陥っていくと考えられる。また、鶴田ほか(2014)の示すように、ネット依存傾向には性差がある。よって、ネット依存と対人恐怖心性の関連にも性差があると推測した。

よって本研究では、まず、対人恐怖心性とネット依存の関連性について調査をする。その上で、対人恐怖心性がネット依存の要因の一つとなること、さらにその要因には性差があることを示し、その考察することを目的とする。

2. 方法と結果

対人恐怖心性とネット依存に関する質問紙調査を2016年4月中に実施した。調査対象者は全日制普通科の公立高等学校第3学年の生徒306名であった。研究倫理の観点から、本調査は無記名で実施し、個人の特定が一切されないものであることを説明した。調査日に欠席した生徒や記入漏れがあった生徒を除外し、有効回答者は282名(男子158名、女子124名)となった。

対人恐怖心性の測定には、堀井・小川(1996)による「対人恐怖心性尺度」を用いた。対人恐怖心性尺度は全30項目であり、「非常にあてはまる(7点)」「あてはまる(6点)」「ややあてはまる(5点)」「どちらともいえない(4点)」「ややあてはまらない(3点)」「あてはまらない(2点)」「まったくあてはまらない(1点)」の7件法で回答を求めた。下位尺度はそれぞれ5項目であり、内的整合性を検討するために α 係数を算出した。下位尺度は「自分や他人が気になる」($M = 3.98, SD = 1.20, \alpha = .83$)、「集団に溶け込めない」($M = 3.76, SD = 1.30, \alpha = .82$)、「社会的場面で当惑する」($M = 4.17, SD = 1.42, \alpha = .83$)、「目が気になる」($M = 3.55, SD = 1.40, \alpha = .82$)、「自分を統制できない」($M = 4.08, SD = 1.20, \alpha = .83$)、「生きることに疲れている」($M = 3.50, SD = 1.20, \alpha = .83$)である。本尺度を作成した堀井・小川(1996)の結果と比較しても高い内的整合性であった。

ネット依存傾向の測定には、鶴田ほか(2014)による「インターネット依存傾向測定尺度」(以下、

表1 男女別対人恐怖心性とネット依存の重回帰分析(強制投入法)

説明変数	精神的依存状態		メール不安		長時間利用		ながら利用		対面コミュニケーション不安	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
自分や他人が気になる	-.02	.19	.39**	.48**	.01	.27*	.13	.23+	-.01	-.03
集団に溶け込めない	.22+	-.09	.06	-.22*	-.05	-.06	-.19	-.04	.30**	.15
社会的場面で当惑する	-.19	.10	-.30*	.28*	-.10	.09	-.32*	.05	.12	.26*
目が気になる	.27*	.06	.39**	.02	.14	.02	.29*	.04	.18+	.16
自分を統制できない	.11	.11	-.04	.01	.31**	.17	.03	.16	-.13	.04
生きることに疲れている	.03	.15	-.10	.03	-.09	.01	.19+	-.04	.11	.05
R^2	.16**	.18**	.21**	.36**	.08+	.18**	.11**	.12*	.29**	.27**

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

ネット依存尺度)を用いた。ネット依存尺度は39項目であり、「とてもあてはまる(4点)」「ややあてはまる(3点)」「ややあてはまらない(2点)」「まったくあてはまらない(1点)」の4件法で回答を求めた。下位尺度の内的整合性を検討するために α 係数を算出した。下位尺度は「精神的依存状態(12項目)」($M=1.82, SD=0.50, \alpha=.84$), 「メール不安(7項目)」($M=1.64, SD=0.59, \alpha=.85$), 「長時間利用(9項目)」($M=2.40, SD=0.62, \alpha=.85$), 「ながら利用(7項目)」($M=2.11, SD=0.55, \alpha=.85$), 「対面コミュニケーション不安(4項目)」($M=1.84, SD=0.62, \alpha=.84$)である。本尺度を作成した鶴田ほか(2014)の結果と比較しても、高い内的整合性が得られた。

対人恐怖心性尺度の下位尺度得点を説明変数、ネット依存尺度の下位尺度得点を目的変数とした重回帰分析(強制投入法)を男女別に実施した。それぞれの標準化偏回帰係数と決定係数を表1に示した。

3. 考察と今後の課題

調査の結果から、対人恐怖心性とネット依存傾向には関連があり、さらに対人恐怖心性がネット依存に与える影響には、性差があることが見出された。本稿では、男女それぞれ異なる対人恐怖心性の下位尺度が、ネット依存下位尺度「長時間利用」に関連があることに着目し、考察をする。

ネット依存下位尺度「長時間利用」とは、ネット利用が長時間続くことであり、利用し始めると止められない傾向であると示している(鶴田ほか2014)。男子では対人恐怖心性下位尺度「自分を統制できない」が「長時間利用」と正の関連を示した。自分を統制できない悩みを持つ者は、自らの意思や感情を統制できないことに対する不安や不安感を表し、対人意識へのとらわれのなかで生じる自己に対する否定的な問題意識の側面を表している(堀井・小川1996)。男子で自らの意志や感情を統制できない傾向にある者は、例えば、ネットの動画視聴やゲーム等において、自らの意志でそれらを止めることができにくい状態にあると考えられる。また、そのような状態である自

分には問題があると否定的に認識し、そのことを悩んでいる状態である考えられる。

一方、女子では対人恐怖心性下位尺度「自分や他人が気になる」が「長時間利用」と正の関連を示した。自分や他人が気になる悩みを持つ者は、対人関係において、自分のことを評価する他者への過剰な意識、すなわち、過剰な他意識や自意識による観念的な悩みを表すとされており、特に相手に嫌な思いをさせているという加害意識を生起させやすい(堀井・小川1996)。女子で他者からの評価に過剰な意識のある者は、SNS等によるメッセージのやり取りに対しても過剰な意識を示すと考えられる。例えば、相手からの評価を気にするあまり、返信を待ち続けたり、自分が送ったメッセージで相手に嫌な思いをさせていないかと考えたりする意識が過剰なため、メッセージのやり取りに長時間かけてしまうと推測できる。

これらの知見から、同じく長時間利用する者であっても、その要因は男女によって異なることが示された。今後は、長時間利用以外のネット依存下位尺度の項目にも着目し、性差を検討する。さらに、ネット依存の予防教育を行う際には、対人恐怖心性における個別の特性を把握し、ネット依存予防の指導を行うことができるような指導法について検討していくことが、今後の課題となる。

参考文献

- 堀井俊章,小川捷之(1996) 対人恐怖心性尺度の作成. 上智大学心理学年報, 20:55-65
- 内閣府(2018) 平成29年度 青少年のインターネット利用環境実態調査. http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/net-jittai_list.html (参照日2018.07.03)
- 鶴田利郎,山本裕子,野嶋栄一郎(2014) 高校生向けインターネット依存傾向測定尺度の開発. 日本教育工学会論文誌, 37(4):491-504
- 海野裕子,三浦香苗(2010) 大学生における「ひとりの時間」と孤独感・対人恐怖心性との関連. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 12:51-61